◇資　料◇

中舞鶴の……米騒動について

本誌第九号で〝舞鶴の米騒動について〟藤田欽也氏より、その原因、経過、意義等を明らかにしていただいたが、その後中舞鶴地区の年輪会（現老人クラブの前身）が数年前中公民館長の肝入りで郷土誌談義を録音していることが解り、その中で中地区での米騒動の件が語られているので、これを集約整理し、資料として収録することにした。

（瀬戸美秋　記）

○神成与七氏（明治二十五年生　当時海軍々人）

米騒動の前日は、中舞鶴でも町の人々が米の値段が毎日のように上るので不安は募る一方、いつ米騒動が起るかわからないので心配だと語っていたが、下二丁目の下士卒集会所でも海兵団から電話で今晩あたり米騒動があるかも知れぬから厳重警戒をするよう連絡があり、様子をさぐってみると今夕工廠の職工が退場する頃決行するということがわかり、海軍では一早くも一ケ小隊を長浜海軍倉庫に派遣待機させていた。

いよいよ時は迫り、みるみる中に下一丁目の酒保前は、ヤジと暴徒で黒山となり、児童公園の方から一心会と書いたちょうちんをつけた一団がワーッというかん声を上げて酒保目指して集まり、折から工廠の退場時とあって職工たちと共に一層気勢を上げ、酒保に入った暴徒は、二階に上って電燈を消し、消したと思ったら大事なものからドンドン下にたたき落し、米は外に引っぱり出し俵を片っぱしから鎌で切り、道に明けてしまい、酒保はまたたくまに破壊され全滅の状態になり、続いて吉岡という米屋にも押掛け米俵を切り、これも同様、道にぶちまけてしまった。

これに乗じてかれらは『こんどは長浜だ』と怒声を上げ、煽動するものを早くもみた。石油缶をたたいて長浜の坂を一目散に下ってきた。この時長浜では、海軍が一箇小隊を二隊に分け、全隊員着剣というものものしさで第一線は神社前の両方に、第二線は米倉庫前にそれぞれ配置してあった。この下ってきた暴徒の一団をみて、小隊長は大声で解散を命じたが、かえっていきりたった群衆は、制止も聞かず投石、投木等ますます反抗し、『ヤレーヤレー』と連呼するので、たまりかねた小隊長は、やむなく『突撃にー』の最後の手段をとったので、ついに暴徒は、命からがら四散した。あの際溝に、或は田圃に落ちる者もあり、悲惨な目に会って解散した。あの時もし海軍が出動しなかったら長浜米倉庫も酒保同様全滅したであろう。

○永井大蔵氏（明治十九年生　当時海軍工廠職工）

なお騒動当時、退場してくる職工に入り混じって警察官が私服で警戒していたが、手に白墨を持って群衆の中に入り、共に『ワッショイワッショイ』と奇声を上げたようなふりをして職工の服の背中とか脇に何かわからない文字を書いてその本人の後日の証拠にするつもりであったと思う。

現場でつかまえられて、中派出所の留置場に入れられたものもあるが、その場所へ刑事が、つかまったふりをして中に入り、『あんたどんなことをした』『わたしはこうこうした……』『そうかえらいことやったなあー、うまいことやったなあー、おれもやってここへ入れられたんだ』というようにして、その人のやったことを、その人の口からはかしてつかまった者もあり、翌朝私は何知らぬ顔をして工廠に出勤したら、来ていない者が何人もあって、その人はどうかというと、背中に文字を書かれたものだからして、門の入口で『おい、ちょっとこい』といって引っぱられ背中の文字を目当てに拘引した。その当時伍長であった私は、ある船の上甲板に引っぱり出され、いろいろ質問されたが、私は参加してない。私の知った人でも長い間監獄に入れられた人もあり、なかなかその当時の悲惨な状態は申し切れない程であった。

註、なお右収録には、武田直平氏（明治二十四年生、当時海軍工廠退職）の聞取りも参考にした。

＜例会だより＞

◇六月二十八日　西公民館
「丹後の伝説について」（中嶋利雄氏）
「細川藤孝の消息巻子について」（井上金次郎氏）

◇九月二十七日　西公民館
「細川幽斉の目利心得概略について」（池田儀一郎氏）

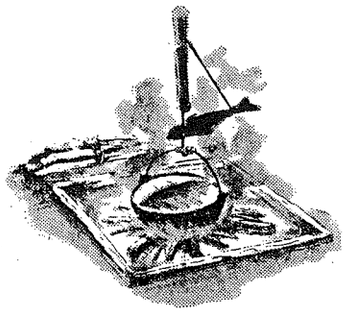
◇十一月二日　福知山市（福知山信用金庫本町支店）　両丹地方史研究者発表大会

＜編集後記＞

本誌も創刊以来ここに五年、ようやく第十号を発行するはこびとなりました。これもひとえに読者の皆さんの変らざる御支援の賜物と深く感謝いたします。

新宮氏の一村方騒動の紹介は、近世後期の農村社会の動向を生々しく描出していますが、このような騒動は各地の村々に存在したと思われます。

百姓一揆とともに、これらを丹念に調査して幕藩体制の根底を動揺させた当地方の農民騒擾の全容を究明したいものです。

当研究会で企画していた戦前の諸闘争資料蒐集の第一着手として、米騒動の聞取り調査を瀬戸氏をわずらわせて収録することができました。調査に便宜をはかっていただいた中舞鶴公民館に謝意を表すると共に、今後の採集に市民の皆さんの御協力をお願いします。

（真下八雄　記）